

「対テロ戦争」が続く時代の安心・安全----
海外に暮らす日本人をどうやって守るのか

第8回四大学連合文化講演会(2013.10.11)

『環境・社会・人間における「安心・安全」を
探る――安全で安心のできる社会～学術
研究の最前線をやさしく解説する』

飯塚正人(東京外大AA研)

「対テロ戦争」の戦果

- 2001年9月11日の米国同時多発テロ事件をきっかけに米国主導で展開(ただし、オバマ政権は「対テロ戦争」という用語の使用を中止)
- 2001年のアフガニスタン戦争、2003年のイラク戦争のほか、2006年のイスラエル・レバノン戦争、2009年のイスラエル軍によるガザ(パレスチナ自治区)空爆、2011年の米軍特殊部隊によるオサーマ・ビンラーディン殺害など。
- では、2011年に世界で起きた「テロ」事件の数は？
 - ★10283件(2011年)
 - ★稀な事件しかニュースにならないがゆえの誤解
cf.) イラク・サマワ住民の来日体験

アルジェリア人質事件

- いかにして海外在住邦人の安全を守るか、という重い課題が本格的に浮上（もちろん、海外進出企業は武装ガードマンなどの手当をしているが...）

cf.) ナイロビ・ショッピングモール襲撃事件（2013年9月、ケニア）の幸運



海外に暮らす日本人を守る限界

- 自衛隊を海外派遣できるように法改正するとか、人質救出のための特殊部隊を強化するといった案も耳にするが、各国には主権というものがあり、他国で自由に作戦行動を取ることはできない

最初からわかっていた危険

「これは「戦争」なのだ。宣戦布告した相手に反撃されないと信じていい理由などどこにもない。日本国内はともかく、今後の展開によっては、海外に居住する日本人や日本企業の安全が脅かされる危険を当然考慮しておくべきだろう。日本政府にその準備は出来ているか。」

(拙監著、2001年)



では、安全確保の方策は？

- 決め手となる対症療法が存在しないとしたら、抜本的に「テロ」の原因を減らして行くしかない。
⇒ だが、そもそも「テロ」とは何か？
- 「**非国家集団**もしくは秘密のエージェントにより、非戦闘員を標的として、入念に計画された、政治的動機を持った暴力を意味し、通常それを見る者たちに影響を及ぼすことを意図するもの」(米国務省による定義:2000年) ⇒ ナチス占領下の**フランスのレジスタンス**をイギリスから指導した**ドゴール**将軍はテロリストではないだろうか？

アルジェリア人質事件政府対策本部での安倍首相の発言(2013.1.21)

- 世界の最前線で活躍する日本人が、何の罪もない人々が犠牲となり、痛恨の極みだ。残されたご家族の方々のお気持ちを思うと言葉がない。
- 無辜(むこ)の市民を巻き込んだ卑劣なテロ行為は決して許されるものではなく、断固として非難する。わが国は引き続き国際社会と連携して、テロと戦う決意だ。

ヨルダン大学戦略研究所による アラブ諸国世論調査からわかること

- 問題は、「テロリストとテロを推奨する者」(キャメロン英首相)も同じ理屈で「テロ」と戦っていること。
- テロの第1位は、イスラエル軍による無辜のパレスチナ市民の殺害。よって、彼らはイスラエルや米国の「テロ」と戦っているつもり。

⇒ 「対テロ戦争」には誰もが賛成。ただ、実態は完全なる同床異夢。



ムジャーヒディーンを 正当化するジハードとは？

1) イスラーム法の支配する国家の樹立と拡張

～ カリフが指揮する必要があるため、カリフのいない今日では実行できないと考えられている

2) 異教徒の攻撃・侵入に対する防衛・抵抗

～ カリフが不在でも防衛戦争はムスリム成人男子全員の義務

⇒ イスラエル、米国、ロシア、中国などが攻撃される理由

* カリフ＝全イスラーム共同体のトップ

1970年代以降のジハード

1973 第四次中東戦争

それまで「**反帝国主義闘争**」として戦われてきた対イスラエル戦争が「ジハード」と位置づけられる ⇒ ジハード思想の復活

1979 ソ連軍アフガニスタンに侵攻

⇒ 東のジハード戦線(アルカーイダへ)

1982 イスラエル軍が南レバノンに侵攻

⇒ 西のジハード戦線(ヒズボラなどへ)

1970年代以降のジハード

1990年代前半

ボスニア内戦

.....2001.9.11

米国同時多発「テロ」

☆ムスリム同胞意識の著しい強化 & 各国政府による武闘派「輸出」の試みが背景に



アルカーイダ (⇒ジハード主義者)になる理由

多くの若者にとって、テロリストへの道は自宅のテレビから始まる。ボスニア、チェチェン、カシミール、パレスチナ。若者たちはテレビ画面に映し出された光景を見て、イスラム教徒が世界各地で追い詰められ、虐殺されていると確信する。宗教的熱情に駆られた彼らは、地元のモスクやインターネット上でイスラム防衛の誓いを立てる。そのなかには、(中略)飛行機代を工面してペシャワルへ向かう者もいた

(『ニューズウィーク』日本版2001年9月26日号、C.デイツキー中東総局長)

国境を超えるウンマ同胞への思い

- 世界では善と悪の普遍的戦いが進行している、**イスラムと、その教えである善行と正義を実践するムスリムたちが絶望的危機の中にあると考える、かれらの中心的思想はいつも現実によって立証されている**

(ジェイソン・バーク『アルカイダー——ビンラディンと国際テロ・ネットワーク』講談社、2004年、p.429)

- * 人びとの共感＋内戦武力としての価値
⇒ アルカイダ系の拠点形成へ
- * リクルートを容易にする高失業率

ジハード主義者の変容 「人生いろいろ、テロリストも...」

「殉教の美学」に囚われた若者たち

- 戦闘における殉教
- 殉教志願による殉教

⇒ **自爆テロ(殉教攻撃)の量産**

cf.)「預言者は殉教者になることを望んでいた。「私は神の道に殺されたい。それから生き返ってまた殺され、また生き返って殺され.....」(オサーマ・ビンラーディン)

* ただし、自爆の起源は日本人という説も有力

ジハード主義者の変容 「人生いろいろ、テロリストも...」

- ヒジュラ(聖遷)*をまねた祖国からの脱出
⇒ 国境を越えたテロ、よそ者テロリストがいよいよ常態化。「戦場がなければ自分で作り出せ！」

* 預言者ムハンマドが622年にマッカを逃れてマディーナに移った事件。ジハード主義者たちは、力のないときはよそに逃れて、逆襲の準備をすべし、という教訓と考えている

さらに、いわゆるゴロツキやドロップアウト組も合流
⇒ 一般ムスリム市民も恐くて逆らえない組織に変化

「対テロ戦争」の現実と対策

- 敵は見つけられ次第、抹殺されておかしくない状況にある「テロリスト」⇒ そういう敵である以上、**反撃される(テロに訴える)のは当然**と冷静に割り切って考えないといけない(「戦場」で暴力の是非を説いても、効果はない)
- 他方で、われわれの考える「テロ」を撲滅して安全な地球を取り戻すためには、「テロ」の原因(=彼らの考える「(国家)テロ」)も撲滅しなくてはならない。
- 安全への第一歩は、彼らの怒りの源を知ること。

